
たった一つの世界

夏目真七

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たった一つの世界

【Nコード】

N9874M

【作者名】

夏目真七

【あらすじ】

日常と非日常、現実と非現実が何故かいつも隣り合わせ。絵描きを目指す主人公・夏野 晋はひょんなことから科賀屋という屋敷の居候になってしまう。その日から晋を取り巻くのは不思議な能力を持つている明石 喪介を初め、晋の居候先の主・ジジ（爺）と孫の芽衣子と黄美子、変わった作品を作り続ける少女・遥、古本屋の店主・蒼筍、死を司る天使レイラと部下の人形・フルマロウ夢葵、他様々な登場人物がドタバタするほのぼのストーリー。

1・晋

俺は夏野 晋。絵描きだ。自称だが、絵描きとして生活している。

だから絵が売れなければお話にならないし生きていけない。

なんとか高校、大学（短大だが）まで出してもらった手前、遠い故郷の両親を頼るのも申しわけなく、合わせる顔がない。

今は絵を描く道具の材料費と奨学金の返済と仕送りで頭が痛いのも厄介な問題だ。

就職活動もせず、バイトをそこそこやりつつ、安いアパートで生活していたが、隣の民家が全焼してついでにアパートも全焼した。（あとひと月で春、という時期だったのが良かったのかなんなのか）全財産を失った俺に残されたのはなんとか抱えたスケッチブックとたまたまポケットに突っ込んだままだった財布だけ。

今までのバイトの稼ぎを全て下ろしても家を見つけるのは難しく、公園で生活をした。

大学で話す人間は指の数ほどぐらいならいたが、携帯を持っていない今の俺に連絡手段など無い。

もちろん、知人の住所や電話番号など覚えているわけもなく、例え知っているからといって泊めてくれなどと言えるほどの仲だったわけが無い。

夏場は公園の水道で匂いだけは取ろうと努力した（体臭のきつい絵描きの絵など、よっぽどの天才でもないなら俺だって買いたくは無
い）

冬は一週間や二週間洗わなくても平気だが、さすがに限度を感じれば洗う。（2度に1度は水の冷たさに断念する）

そんな中、俺は地道に絵を描き、地道に道端で売ってみた。（警察に補導された。許可がないと駄目らしい。世知辛い世の中である）仕方が無いからいろいろんな所で売り込んだ。（たとえば商店街の魚屋には魚の絵を、みたいに）

しかし皆さん、いい笑顔で褒めてはくれるが金の話をすると途端に目が笑ってくれなくなる。

もちろん売れるわけがない。（1000円ぐらい出してくれたっていいと思うが俺の考えが甘いのだろうか）

そして約10ヶ月。

殆どホームレス状態になっている俺は、最近街を歩くだけで通行人の視線が痛く感じる。

気のせいなのか。自意識過剰なのか。臭うのだろうか。身なりなどの雰囲気でなんとなく想像されてしまうのだろうか。

もう冬も本格的に厳しくなる。

俺は有り金を全て断腸の思いで銭湯に使った。

湯には浸からずシャワーだけでいいと番頭に訴えたらまけてくれた。ついでに牛乳も奢ってもらえた。あなたは神か。

そして最後の奮起とばかりに、身も心も綺麗にして絵を売り込みにいく。

ここで売れなかったらきつと俺はこの冬死んでいる。

パンツだけは新調できなかつたから死んでも死にきれない。

そして俺は絵を並べて手を合わせて祈りを込めた。

神様は信じてないから神社には行かない。

しかし、自分の絵は信じているから、我が子を送り出す気持ちで送り出すのだ。

「天象堂」と看板が掲げられた古本屋に足を踏み入れると、レジ脇には眼鏡をかけた黒髪の青年が本を読みながら店番をしていた。今時珍しく着物と袴姿で、雰囲気的には少々近寄りがたい。

切れ長の瞳にきゅつと締まった唇が気難しそうな印象を与えており、よく見れば割と端正な顔立ちなのも手伝って余計に話しかけずらい。しかし尻ごみしている場合ではないのだ。

意を決し、俺はレジの向こう側に恐る恐る声をかけた。

「す、すみません！」

「あ、はい？」

「俺、絵描きやってるんですけど、この絵を買ってくれませんか！
」？

レジから良く見えるように翳す。

青年、天象テンシヨウ 蒼筤ソウランは青い瞳をジッと向けて、暫く絵を見つめていた。
描かれているのは蛙だ。

「へえ。描いてんの」

「はい」

「ふーん。うまいじゃん」

「ありがとうございます」

「で？」

「買って頂きたいんですけど」

「これを？」

「はい！」

「……」

「よろしくおねがいします！」

「よろしくさねても」

「よろしくおねがいします！」

「あ……」

「500円！いえ、300円でいいですから！」

「八八」

「お願いします！」

「分かったよ」

「本当ですか!？」

「うん。俺もこーゆうの嫌いじゃないし」

そう言って少しだけ表情を和らげた蒼筤に、後光が見えた。
この人いい人じゃないか……!

「2000円で買ってあげる」

「舐めてんですかぁ！」

前言撤回。

「何事じゃ？」

ガラガラっと入り口の自動ドアを開け、白髪の爺さんが店に入ってくるなり声を掛けてきた。

もしかしてこの人がこのオーナーなのだろうか？

「科賀谷の爺さん、これ、今買ったんですよ」

「ほほう。なんじゃ、君が描いたのか？」

感心したように目を見開き、爺さんが俺に視線を向けた。

「は、はいー！」

「ほうほう」

「あの、もしかしてこのオーナーさんでいらっしやいますか？」

「ほ？いんや、ワシはただの客じゃよ。店主はこっちじゃ」

気持ちの良い大らかな笑みを浮かべながら蒼筍を指差す。

へえ、この年で店を任されてるのかぁ。若いのに凄いなあと素直に感心した。

「絵なんですけど、この辺とかに飾ってみたら良いと思うんですよ」

すると蒼筍がレジの後を指差し、爺さんは俺の絵と位置を見比べてうんうんと頷いている。

え、そんな目立つところに飾ってくれるんですか！？

やっぱりこの人いい人！値切られたけど。

「ふむふむ。いいんじゃないかのう。蛙は商売繁盛するぞ」
「そうなんですか。じゃあ君、これ御代ね」

慌てて手を出すと、200円がコロンと落ちてきた。

その瞬間、俺は思わず顔をくしゃっと歪ませてしまった。

「ありがとうございます！」

「あははははは！」

深々と頭を下げた俺の頭上から蒼筈の笑い声が響いた。
人が泣いてんのに笑うな。

2・宿無し

「これでよしと」

200円を手に入れた俺は、とりあえずそれを大事にポケットにしまった。

帰りに行きつけのパン屋でパンの耳を貰い、使い古された水筒を持ってコンビニでお湯を貰う。

そして一週間に一回の恒例行事。

ご近所を駆け巡って救援物資を恵んでもらいに行くのだ。

画材道具中心に回ったのが良かったのだろうか、好意と言う名のカップライメンまで頂いちゃって。

不況だなんだでギスギスしてると思ってたけど、世の中捨てたもんじゃないな。うん。

それにしても風が強いなあ。このテント大丈夫なのか？と少しばかり不安が過ぎる。

すると不意に公園の脇を1組の親子が通りがかった。

「今夜から台風が直撃するんだってー」

「怖いわねえ。ベランダの花、大丈夫かしら。早く帰りましょうね」

「……………」

だ、誰か一人くらい、台風が来るよって教えてくれたって……!!
あれか! 食い物はやるから寝床は貸さねえよってか!?
でも誰か、誰か一人くらい教えてくれたっていいじゃないか!?
3
0 軒ぐらい回ったのに……!

「はあ。とりあえずテントでも屋根があるだけマジか。飛ばされな
いようにロープでも探してこよう……。最悪、テントが飛んだら
蒼筈さんの店に縋るか」

「ハークシヨン!!」

古本屋の店じまいをしている蒼筈は、お約束のように大きなくしゃ
みを連発し、鼻を啜った。

「あ”ー……風が強くなってきたな」

好き勝手に縋られているとも知らず、ずびっともう一度鼻水を啜り
ながら戸締りの準備を急ぐ蒼筈であった。

ひと通りテントを紐で固定する作業を終えた頃、時刻は午後3時だ
というのに黒い雲が空を覆っていた。

あきらかに悪化の一途を辿っている怪しげな雲行きに、テントが飛
ばされないかよいよ不安になってくる。

ここは思い切ってテントを破棄し、去年のように電話ボックスを占
拠する方が無難だっただろうか。

「いや、でもなあ。うっかり寝こけて朝起きたら台風が止んだ代わ
りに、お巡りさんが不審者を見るような目で覗き込んだのが未だ
にトラウマなんだよなあ・・・」

去年の今頃を思い出し、俺は溜め息を吐いた。

正直言つて元々好きではなかったが、あの一件で更に輪をかけて警
察不信になってしまったのだ。

もうあんな事態になるのは出来れば避けたかった。

そうこうしている間にも、風はふき、雨雲が迫ってきている。

人影も完全に途絶え、ここも陸の孤島状態になりつつあった。

世界に自分1人だけしか居ないような錯覚に陥りそうになり、早く
準備を済ませようと焦りを覚えつつ次の作業に移ろうとした、その
時。

「おや、青年。こんな所にテントを張るつもりなのかね？」

突然に声を掛けられ、振り向いた場所にはあの古本屋にいた爺さん

と、黒目がちな瞳が印象的な大人しげな少女が立っていた。爺さんは一瞬目をパチクリし、「おや？君はあの時の・・・」と思いで出してくれたらしい。

「なんじゃ若いの。こんなところで生活しておったのかい」

「あはは、まあ」

後頭部を掻きながら苦笑いを浮かべる俺に、少女が驚いた表情をした後、心配そうに俺を見た。

「今夜は台風ですよ？家、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫ですよ！こうして杭も作りましたし」

見たところ中学生ぐらいの少女に心配されて妙に気恥ずかしくなり、テントの横に準備してあった手作りの木製の杭を慌てて拾って少女と爺さんに見せた。

そしてトンカチがわりの丸太で杭を打ち込み、素早くテントを固定する。

「ね！？」

「・・・でも・・・」

それでも不安そうに見上げてくる少女は、黒い大きな瞳を心配の色に染めてしまっていた。

少し可愛いなあと思っていただけに、不安そうな瞳に戸惑いながらも悪い気はしない。

さてどう答えようかと考えていると、前触れも無く真横から上へと舞い上げるような強い突風が吹き荒れた。

突如。

その突風が軽やかに呆気なく、テントを盛大に吹き飛ばした。思わず3人共、一斉にその光景に目が点になる。

「あ」

その後にあつという間に見えなくなるまでテントが飛んでいき、テントの中にあつた荷物もテントから追い出されて暴風に弄ばれていた。

「ああああ・・・！」

重量のある絵描きセットはどうか無事であったが、残りの衣服や水筒やパンの耳やカップラーメンはその辺りを四方八方と飛び去っていった。

愕然としてテントが消えた空を見ながら立ちすくむ。

そして俺は本当に無意識に、縋るような思いで機械のような動きで爺さんに振り返った。

「あ、あの・・・」

振り返った先には、ニッコリ顔でただ頷く爺さんがいた。

「若いの。少々の雑用をやるんじゃないから、ワシの家に泊めてやらんでもないぞ」

飛ばされたスケッチブックを見事に少女がキャッチし、ニッコリ微笑えんだ。

俺、あまりの展開にしばし無言。

そして考えること0.3秒後、深々と頭を下げる。

「お、お世話になります。なんでも使ってください！」

爺さんの苗字は科賀屋というらしかった。

名刺まで貰い、恐縮しながら受け取る。

「科学の科ですか。変わった字を書くんですね」

「そうじゃのう。しかしこれから行くと分かると思うが、もっとや

やこしい事があるんじゃない」

「は？」

「ワシの家の隣が骨董屋をやっているの、そこも”カガヤ”なんじやよ」

「えーと、骨董屋もやってるんですか？」

「いやそうじゃなくてな、加わるという字で加賀屋と読む、全くの無関係でな。縁もかけらも無いんじゃないよ」

「はあ……」

それはややこしいですね、と言った方がいいのだろうか。

「こっちはワシの孫で芽衣子じゃ。お前さんより大分年下じゃろうが、しっかりしておるぞ。何かあったら芽衣子に言いなさい」

少女を指しながらいきなり紹介され、慌てて少女の方を見る。強風で煽られている長い髪を抑えながら、控えめに小さくお辞儀をして芽衣子はニコツと笑った。

「はじめまして。科賀屋 芽衣子です」

「あ、こちらこそよろしく。夏野 晋といいます」

「よろしくお願ひしますね、夏野さん」

「えーと、芽衣子・・・ちゃんは、まだ中学生？」

「今は中学3年生で、4月からから高校1年生なんです」

へえ、と俺はなんとなく相槌をうった。

おっとりとした喋り方をする芽衣子であるが、見た目には年齢よりもしつかりとしている感じの子だ。

「俺は今年で二十歳なんだ。5つ下かあ」

「そうじゃ、どうせなら勉強でも見てもらったらどうじゃ？」

「え？でも、そんなの夏野さんに悪いんじゃないあ」

え！？

ちよ、待て！何勝手に提案してくれてんだ爺さん！

毎回赤点スレスレだった俺の学力を舐めんなよっ！短大だって推薦だったしな・・・。

「なんか虚しくなってきた・・・」

「え？」

「いえ、なんでもないっす・・・」

そうして連れてこられた家は想像を遥かに上回っていた。

今まで壁伝いに歩いて来たが、その壁が全てこの家の壁だったらし

い。

これは成績の悪さがどうのと言っている場合ではない。
家というより屋敷といった方が相応しいような敷地の広さに愕然と
なった俺は、この家の雑用って一体どんな規模なんだろうと呆然と
立ち尽くしたのである。

「で、なんで便所掃除!？」

栄えある最初の雑用は、屋敷内だけで3つあるという便所の掃除で
あった。

「屋敷内だけで」とわざわざ付け足した意味がもうお分かりだろ
うか。

ご想像通り、庭にももう一つ便所があるらしい。ありえねえ。

「それが終わったら風呂に入っているぞい。夕飯はその後じゃ」

「は、はい!」

「これから毎日朝晩やってもらうぞい。便所係り君」

「ええ!？」

三角巾にエプロンにゴム手袋というフルコースを身に包み、言われ
た言葉に思わずそんな言葉が出た。

そこへひよっこりと顔を覗かせたのは芽衣子である。

「夏野さん、お部屋の準備できました」

「あ、すみません。お手数をおかけしまして」

自分が居候だという立場を思い出し、なんとか平静を装って頭を下げる。

こんな情けない姿を年頃の女の子に見せてもいいものかと、俺は自分が置かれている状況を思っで心底泣きたくなった。

「気を使わなくて結構ですから、ご自分の家だと思ってくつろいでくださいね」

「あ、ありがとう。芽衣子ちゃん」

(ええ子や〜・・・！マジええ子や〜・・・！)

心の中で感涙しつつ、とりあえず便所掃除を早く終わらせてしまおうと腕を捲くる俺であった。

その後、芽衣子に案内されたのは10畳はありそうな畳部屋だった。本当にデカイな、この家。

「この部屋です。客間なんですけど、これから好きに使ってください」

「ありがとう・・・え、これからって?」

「え？だつてテントが無くなつちやいましたし」

「ぐ！」

「夏野さんさえ良ければずっとここにいても構わないってお爺ちゃんと言つてましたから。だから気にしないで下さい。それじゃあ、お夕飯が出来たら呼びに来ますね」

「はあ。本当に、ありがとうございます」

芽衣子はニコリと微笑み、廊下に出てから一度座り、襖を閉めて部屋を出て行った。

「本当に出来た子だなあ……」

暫し芽衣子が出て行った襖を見つめたあと、俺は倒れるように布団に寝転がった。

「ふう」

仰向けのまま、布団の上をゴロゴロし、改めて部屋の中を見渡してみる。

いかにも昔ながらの和室といった感じだが、備え付けの小さなテーブルと連れてこられた時にはすでに敷かれていた布団以外は本当に何も無い部屋だった。

唯一新鮮に映るのは障子だろうか。

もしかしてこの先は庭かと思い、布団から這い上がって障子に近づき手を掛ける。

そして躊躇なく障子を開いた。

「うわっ！」

障子を開いた先に小さな女の子が一人いて、予想外の出来事に思わ

ず飛びのいた。

女の子は見た目4歳ほどで、小さな腕には少々古びたクマを大事そうに抱えていた。

おでこを出してツインテールにしているせいか、活発そうな雰囲気がある。

見た感じから言えば、芽衣子とはまったく逆のタイプだ。

そんな女の子は俺の悲鳴にも動じることなく、無表情でじつところらを見ていた。

俺はようやく起き上がり、女の子と視線を合わせて片手を上げて挨拶を試してみた。

「やあ。こ、こんにちは」

言いながら、そういえば孫が2人いるって爺さんが言ってたな。もしかしてこの子か？と内心首をかしげていると、突然。

「べー！」

女の子が俺に向かってアツカンベーをし、あっというまに走り去ってしまった。

発声された声の可愛らしさとは反対に、可愛げのない出来事に俺は表情を引きつらせてしまう。

「な、なんだあ？今の」

どうにか寢床を確保したと思ったら、何もかもそううまくはいかないという予感に駆られながら、果たしてこの家に来て本当に良かったのだろうかと考えてしまった。

ちなみに、障子の向こうには縁側と広大な庭があったが、あのまま公園に居たら俺は今頃どうなっていたのかと思う程外が荒れ狂っていた。

ここに来て良かったんだね。俺。

3・変な奴（前書き）

ここからは三人称でお送りします。

3・変な奴

古き良き日本家屋でのとある日曜日。

すつきりとした晴天に恵まれ気持ちの良い朝だった。

庭には鳥が囀り、美しい椿が寒々しい庭園を華やかに彩っている。

朝食は全員で居間の炬燵に入り、一緒に食べた後は皆思い思いに過ごしていた。

この家の主である科賀屋の爺は1人将棋に余念がないし、この家の中で最年少である黄美子は庭と玄關を行ったり来たりしては遊んでいる。

仕事の都合で一年の殆どを海外で過ごしている両親の変わりに、黄美子の面倒や炊事洗濯をしていたのは芽衣子であった。

高校受験もひと段落し、ここ最近芽衣子はずっと晴れやかな気分です。毎日を過ごせる喜びに浸っていた。

炊事洗濯掃除を呼吸をするようにこなし、すっかり日課となっていた持ち回りの便所掃除も今は後継人が全てやってくれているのでその分の空いた時間が出る。

その時間を芽衣子はいつもお茶を入れる時間に使っていた。

自分の分のお茶と、この家の居候であり便所掃除の後継人である晋の分のお茶である。

棚から茶葉と饅頭を取り出し、それらをとりあえずキッチン台に置く。

芽衣子はお茶を入れて菓子と一緒にお盆に乗せ、これでよし、と表情を綻ばせながら呟いた。

晋がいる畳部屋にはエアコンが無い。

その為冬は死ぬほど寒く、夜もまともに眠れなかったほどだ。

このままでは死んでしまうと生命の危機を感じて炬燵に避難し、そのまま寝オチして風邪をひくという王道パターンを体験した辺りで晋はこれはどうにかしなければならぬと養生中に芽衣子に剥いて貰ったミカンを食べながら考えていた。

なので晋はバイト代が入るとすぐさま画材道具の補充より先に安いヒーターを買った。

2千円もしなかったヒーターはそれでも充分なほど役立っているらしく、青白い顔で毎朝起きてくるようなことはとりあえずなくなつた。

そんなわけで、最初は殺風景で何もなかった晋の部屋には晋が今まで描いた絵の他にテールブルとヒーターが仲良く寄り添っており、その近くで晋は相変わらずのんびりと絵を描いている。

畳の上に新聞紙を敷き、その上に低いイーゼルと油絵セットを置いて極力汚さないように配慮していた。

「晋さん。開けますよー」

「どうぞー」

芽衣子が襖を開けると、晋は襖に視線を向けることもせずキヤンバスと向き合ったまま「いらっしゃーい」と言い芽衣子を出迎えた。キヤンバスに筆でペタペタと色を塗る横顔は真剣そのもので、もしや邪魔だったかしら？と芽衣子は少し悪かったかな、と思いながらお盆を持って静かに部屋に入った。

「今、大丈夫でした？」

「ああ、うん。もうちょっとできりがつくから」

「少しは休憩してくださいね。朝からずっと籠りっぱなしじゃないですか。もうすぐお昼ですよ」

晋の横に膝を付きながらお盆を一端置の上に置き、お茶をテーブルの上に置きながら芽衣子は心配そうに言った。

しかし晋は生返事をするだけで筆を止めようとはしない。

それでもその横顔がとても楽しそうだったため、芽衣子はその後何も言わずに軽く笑い、晋が絵を描き終わるのを静かに待っていた。

邪魔をするのは悪いと思うのと同時に、こうなってしまった晋は自分が納得のいくものを描き終えるまで絶対に止めないということはこの短い間に芽衣子は理解していたからだ。

それから5分後、一区切りついたのか晋は「ふう」と息を吐き出し、筆を置いて伸びをした。

「ああ、芽衣子ちゃんごめん。ありがとう」

「いいえ。私もここに来るのが楽しみですから」

ニコリと笑う芽衣子に晋もホツとしたようにつられて笑った。

傍らに常備している専用のタオルで汚れを出来るだけ拭き取り、それでも落ちなかった絵の具を水道まで行って手早く落としてくると、ようやく一息ついた。

やっと休憩できたとばかりに湯飲みを持ってお茶を流し込む。

「はあ〜。やっぱり芽衣子ちゃんのお茶はうまいね」

「ふふ。お世辞でも嬉しいです」

「いやいや、本気だって」

本当に真剣に言っているのだが、何故か毎回冗談だと捉えられてしまっている。

何故だろうと首を傾げながら、「本当なのになあ」と晋は苦笑した。その様子を見て芽衣子はクスクス笑っている。

そして晋が描いていたキャンバスに目を向け、覗き込むようにして

描きかけの絵を見つめた。

「今日は何を描いているんですか？」

「ああ、庭の椿が綺麗に咲いていたんで、昔デッサンしていた尾長と合わせてみてたんです」

「あ、本当だ。うちの椿ですか？綺麗ですね」

芽衣子がキャンバスを覗き込みやすいように晋は少しだけ後ろに下がった。

感心したような芽衣子の横顔が間近にあり、褒められた事でこそばゆい感覚になる。

「本当にここに尾長がいるみたい。素敵ですねえ」

「いやあ、それほどでも……。あつはははは」

ストレートな感想に晋は後頭部を掻きながら照れ隠しに笑った。

それから何気なくキャンバスに視線を戻し、絵の進み具合を確認しようとした。

その時である。

「あ」

晋は絵の中に不自然なものが描き込まれているのに気付いて目を見開いた。

それはまるで心霊写真のように、一部分だけが何かの顔のように見える。

その一部がまるで鬼のような形相でだんだんとブレながら絵の中で蠢き、その不気味な姿が徐々に物体に変わり、絵から浮かび上がってこちらに向かって飛び出してきたのだ。

現実には絶対に有り得ない現象が起こっている。

晋はハツと息を飲むと、とっさに筆を取り、黒い絵の具をありったけキャンバスに出して絵を塗りつぶした。晋のいきなりの行動に、芽衣子は驚いた表情で晋と塗りつぶされた絵を見比べた。

「し、晋・・・さん？」

芽衣子には何も見えていなかったのだろう。

晋はキャンバスの殆どを黒く塗りつぶした後、すっかり台無しにしてしまったキャンバスを目の前にして立ち尽くし、沈痛な表情をして重い溜め息を吐いた。

「はあ〜」

その後、呆然とした顔で見つめてくる芽衣子に向かって苦笑いをし、なんでもない、と力無い声で言った。

どう見ても普通ではない様子に、芽衣子は無意識に首を横に振ってしまった。

「ど、どうして塗りつぶしちゃったんですか・・・？」

「あはははは。だから、なんでもないんだって。よし！もう一回描くか！」

元気を取り戻すかのように声を張り上げ、腕まくりをするフリをして気合を入れなおした。

そして新しいキャンバスを探す為に室内を見回した。

「えーと、キャンバスはーっと。どこに置いたか・・・あ、新しいのはまだ枠組みに張り替えて無いんだった。木枠、木枠・・・と」

左右に首を巡らせ、ふとその瞬間、庭の方に視線を合わせた途端に動きが止まる。

「ん？」

庭を見たまま動かなくなってしまった晋に、芽衣子も庭に視線を向けた。

「え？」

庭にある灯籠の影、細いうす緑色の尻尾がパタパタと見え隠れする何かのシッポ。

そしてひょっこりと、二つのつぶらな目が付いたうす緑色の毛玉のような生き物が姿を現した。

バスケットボールほどの大きさのあるそれは、その生命力を披露するかのように機敏に動き回っている。

あきらかにラジコンなどの動きではないと思えた。

晋と芽衣子は目を見開き、驚いた表情のまましばし固まる。

そしてお互いにゆっくりと顔を見合わせた。

それから再びゆっくりと庭に視線を戻すと、やはり毛玉のような謎の生物が庭をふわふわと漂っていた。

どうやら幻ではなかったらしい。

晋は縁側から草履に履き替え、庭に出て息を殺しながら毛玉に近づいた。

毛玉が逃げないのをいいことに目の前にしゃがみこみ、目を凝らして覗き込む。

「何だ？これ？」

晋はそっと両腕を伸ばして謎の毛玉を捕まえようとした。

しかし毛玉は晋の手をすりとかわし、今までの大人しさが嘘だったかのように元気に飛び回り始めた。

「このっ……！くそ……！」

元気に飛び回る毛玉を目で追っていると、急に毛玉の動きが鈍くなりフワフワとゆっくり漂い始めた。

その隙に勢いをつけて飛び掛り、やっとの思いで両手で毛玉を驚掴みした。

「……………」

すると不意に聞いた事もないような美しい音色がどこからともなく聞こえてくる。

誰かの歌声なのだろうが、全く知らない言語が歌うように紡がれ、音色の出所を探ろうときよるときよると辺りを見回した。

その間にも毛玉は手から逃れようとジタバタ必死に抵抗をしている。すると突然、頭上から何かが降ってきた。

「ぎゃ！？」

「おっと？何か踏んだか？」

男の声だった。

何の遠慮もなしに人の背中の上に落ちてきて、なおかつ乗ったままその声の持ち主は平然と暢気にそんな言葉を吐いた。頭をぎゅっぎゅっ踏みつけているのはわざとだろうか。いや、絶対にワザとに違いない。ワザとに決まっている。

「……………」

.....

再びあの歌声がすぐ頭の上から聞こえた。

もしやこの歌の正体はこいつだろうか？と、晋が目だけで確認しようとしたその瞬間に背中がゴリつと嫌な音を立てた。

どうやら謎の男が背中に乗ったまま重心をずらしたらしい。

「うぎゃあ！いつてえ！ちよ、！！！」

そんなところでしゃがむなあ！という叫びは痛みで声にならない。

すると頭上からよきつと出てきた男にしては細い手が護符を翳した。

「さあ、迎えに来たよ」

男がそう言った後に何か聞きなれない言葉を言い放つと、スポン、と毛玉が護符に吸い込まれた。

「!?!」

思わず晋が力の限り起き上がると、反射的に男も一緒に転げ落ちた。急いでその正体を見極めようと男の方を向く。

するとシャツにジャケットを羽織った妙に華のある爽やかな男がへらりと笑顔を浮かべたままどこかに向かって護符をひらひらさせていた。

見た目は20代に見える。

そして男は今頃晋の存在に気付いたのか、きよとんと視線を向けた。

「ん？誰？あんた」

すると一気に表情が幼くなり、その変わりように晋は一瞬だけ驚いたがすぐに頭を切り替えた。

「こつちの台詞だ！人の上に乗っかっておいて、平然としてんな！」
「許可なら貰ってるぜー？そこのお嬢ちゃんに」

そう言つて男はそこに立つている黄美子を指差した。
晋とは未だ打ち解けていない黄美子がこの得体の知れない男を家に入れたと知り、下顎を外さんばかりに愕然とした。

「ついでに爺さんにも」
「爺さんて言うな！老いぼれでも立派な主人だぞ！あてっ」
「老いぼれで悪かったな」

晋の頭に杖がヒットし、涙目で見上げた先には爺が晋の背後に立っていた。

「あいたたたた」
「爺さんっ。終わりましたー」
「うむ、ご苦労だったな」

すると黄美子がとてとと走って来た。

男に向かつて両手を差し出し、精一杯爪先立ちをしている。

「もーしゅーけ」
「うん？」

男は護符をヒラヒラとさせながら黄美子を抱き上げた。
そして護符を黄美子の前に翳しながら笑いかけている。

「あとでこいつと遊ぼうな」
「うん！」

(一体なんだこいつは！)

すると黄美子は男に抱えられながら去り際に、晋に向かって馬鹿にするようなアツカンベーをした。

「んべー！」

「んな・・・!?!」

さすがにカチンと来たが、それよりもショックの方が上回りその場に硬直してしまふ晋。

「さーて茶でも淹れるかの。芽依子、客間に菓子持ってきてくれい」

爺は黄美子を片手に抱いた喪介と続いて庭から玄関へニコニコしながら歩いていく。

芽依子は慌てて爺に返事をした。

「あ、うん!」

そして晋を見る。

「あの、晋さん。大丈夫ですか・・・？」

暗く丸まっつてのの字を書く晋には芽依子の声は届かなかった。

「はあ」と芽依子は額を抑えて溜め息をつく。

これからややこしいことにならなければいいけど。

と、その場で唸る芽衣子であった。

4. どうしてこうなった

先ほどの毛玉を護符の中からボシユンと出し、毛玉に赤い紐のよう
なものを繋いで黄美子遊ばせている男は明石あかし 喪介もすけと名乗った。

流れで晋も自己紹介をし、とりあえず皆で居間の炬燵を囲んで座る。
黄美子は部屋の中で毛玉を追いかけて、毛玉も逃げ回るが喪介にリ
ードで繋がれているような状態の為に遠くまで逃げる事が出来な
かった。

黄美子に飛び掛られ、黄美子のきゃふん！という声と共に畳に転が
り込む。

「きゃはははは」

『クルルルルウ』

毛玉にしてはなんとも可愛らしい鳴き声だ。

そんな変な毛玉を変な紐で繋いでおくことが出来る得体の知れない
男を、晋は居間に入って座ってからもジツと睨みつけていた。

(何だこいつ。何だこいつ。何だこいつ)

「裏の婆さんから貰った温泉饅頭じゃ！みんな食べ！食べ！」

饅頭を口に頬張りながら、晋は謎の生命体の毛玉を半目で見つつ独
自の推理を試みていた。

(そもそもなんだあれ。緑だし、マリモか？いやマリモは飛ばない
か。毛玉にしては生命力がありすぎるし、ていつか生命体という時
点でおかしい。実は俺が知らないだけで東京にはああいう生き物が
そんじよそこらに普通に繁殖して・・・)

「ギャハハハ！してないっつーの」

「お、俺の心を読み取ったあ！？」

得体の知れない男に心で思っていた事を読まれた不気味さに晋が飛びのくと、芽衣子がツツツと近寄っていき晋に耳打ちをした。

「声に出てましたよ、晋さん」

ぎよつとする晋。

「え？」

すると爺が咳払いをし、ようやく説明する気になったのか口を開いた。

「あれじゃよ晋くん。あー・・・と、け・・・ケセラセラ？なんじゃつたかな？喪助」

「ケサランパサランっすよ」

軽く言うものだから、軽く納得してしまいそうになった。

「へー・・・！！？これが！？一時ブームになったってましたよね」

「そうじゃったな」

「飼うと幸せになれるとか言われてる伝説の生命体にあんなことしちゃっていいんですか！？」

晋が指差した先では、黄美子が毛玉を好き放題弄んでいた。

「赤子を捻り潰すようにぺったんぺったんしてますけど!？」

「ケサランパスランって言っても種類があつて、これは俺の家に昔からいる付喪神みたいなものでもあるのね。で、一般的に言われているケサランパスランとはちよつと違うんだけど、放し飼いでても平気だし、凄い動き回るし脱走癖があるしで結構大変なんだよ。まあ俺がこの紐で繋いでる分には平気なんだけど、さっきうつかり逃がしちゃつて」

「なんなんだよ、その紐・・・」

「え?そのうち教える」

「・・・」

「ともかく、元々子供好きな性格だからあいつも喜んでるよ。ほら」

喪介が指差す方向を見ると、畳の上を転がりながら遊ぶ黄美子と毛玉の姿があり、黄美子は「きゃーきゃー」と嬉しそうに毛玉を持っただままゴロゴロと転がっていた。

『ゴロゴロゴロ』

しつぽがパタパタと揺れているのを見て、確かに喜んでるんだなと嫌でも思ってしまった。

喪介が晋に向かってにっこりと得意げに笑う。

「ほらね?」

「いや、ほらねじゃねえよ」

晋は納得いかないという表情で喪介の話聞いており、「はぁ・・・」と息をついた。

そして冴えない表情のまま、毛玉に視線を向ける。

「でもここから見る限りは毛玉のペットにしか見えないっす」

「だよねえ。否定はしない」
「しないのかよ」

するとその瞬間、

『ゴラア!』

「わああ!」

突然毛玉と呼ばれた毛玉が晋の顔面間近で般若の形相に変化し、野太い怒声で晋に向かって威嚇をした。

その後ろで晋を見ながら、何故か黄美子まで頬を膨らませている。

「しん!毛玉って言っちゃめーなの!」

「ええ・・・いやだって飼い主が今否定しないって・・・」

「この子はマリモなのー!」

「マリモはいいんだ!?!」

思わず晋がつっこんだ。

その横で喪介がボソリと呟く。

「どっちにしても毛の固まりなことに違いはないけどな」

ガプツと頭を半分ほど飲み込まれている喪介。

「あ、飼い主なのに噛まれてる」

「飼い主じゃないし。てゆうか、歯はないから痛くないし」

「いやいやいや。早く取れよ」

「こいつ噛み癖があつてさあ、これ以上でかくなると俺まで飲み込みかねないからあんまり餌は与えないでね?」

「え!てか、だったら黄美子ちゃんも容赦範囲内に入るんじゃない

か!？」

「それ言われちゃうと・・・反論できません」

「き、黄美ちゃん!こっち!こっち来なさい!食べられるっ!」

「やー」

「やーじゃないのっ!」

「う、うわーん!」

怒鳴ったのが悪かったのだろうか、泣き出してしまった黄美子をマ
リもが慰めるようにふわふわと飛び回っていた。
そして責めるように晋を睨む。

「なんでだー!」

「あーあ、泣かした」

黄美子の扱いに苦悩する晋に、追い討ちをかける喪介であった。

「晋の場合、何でか優しさが通じてないんだよねえ」

「そうですねえ」

のんびりと傍観しながら分析する喪介に、思わず頷いてしまった芽
衣子だった。

もしや黄美子に何か嫌われるようなことでもしたのか!?!と凄い形
相の爺に詰め寄られ、高速で首を横に振りつつも必死に、

「なななな何もしてません!」

と叫ぶ晋を見ながら、喪介と芽衣子は互いに顔を見合わせ眉を八の
字にして笑った。

5・桜と能力とカップ麺戦争

暖かな晴天に恵まれた3月のとある日。

居間にあるテーブルの上に、ちよこんと4つ置かれていた某食品会社のカップ蕎麦とカップラーメンが妙に哀愁を纏わせて大人しく鎮座していた。

本日は芽衣子の春休みに合わせ、爺と芽衣子と黄美子の三人でディナーランドに出かけている。

もちろん晋も誘われたわけだが、奢ってもらうのは悪いからと言い辞退していた。

それでも気が引けたのかまた今度にしようと言えと芽衣子が言い出す前に、仕上げたい絵もあるから、と晋はどうにかして説き伏せたのであった。

それはともかく、ここで早くも目下問題が発生していた。

もはや日課となりつつある便所掃除・朝の陣をやり終した後、晋はいつものように庭にある物置に掃除道具を片付けに行き、そのまま庭をぐるりと回ってキッチンのある裏口から家の中に入った。

そして水道水をコップに注ぎ一気に飲み干す。

喉を潤し、朝食にしようと思居間に移動した、その時であった。

「あれ？あー、爺さん達ネズミの国に行ってるんだっけ？」

天敵である喪介がいつのまにか家の中に入りこんでいた。

「なっ、んっ、でッ！」

足早に真ん中に置いてあるテーブルを避けて部屋を半周し、喪介に

詰め寄った。

「お前が、ここに、いるんだよ！人んちに勝手に入ってくんな！」

「いや、お前んちじゃないだろ居候野郎。芽衣子に頼まれたんだよ」

「は？」

「お前は絵を描き出すと集中しすぎて食事も忘れるから、様子見に言っただけでください、って今朝メールが来たの」

「・・・ちよつと待て。どうしてお前が芽衣子ちゃんとメール交換なんかしてるんだ」

「どうしてって言われても・・・しょうがないじゃん。結構前から知り合いなんだよ。主に爺さんとだけだ」

「そ、それにしたって鍵はどうやって開けた！？戸締りはしっかりやってたはずなのに」

「ああ、俺ここの合鍵持つてるから」

「なんでだよー!？」

力の限り叫ぶと更に腹が減ったのかぐうつと晋のお腹がなった。

喪介はどっかりと胡坐をかいて座り込み、カップ蕎麦とポットを引き寄せた。

「おい、勝手に食うなよ！」

「勝手も何もこれは俺の分なの。芽衣子がカップ麺置いていったから一緒に食べてくださいって言ってたし、昼か夜はなんか出前でも取れって。金、ここに置いてあるだろ？」

それを聞いて一気に脱力した晋はへナへナと座り込み、黙ってカップ蕎麦を自分の元に引き寄せてビニールを破った。

2人して仲良くお湯を淹れ、待つ事3分。

いつもならば全員揃って「いただきます」というところだが、こいつとそんな挨拶はしたくないと晋は手だけ合わせて心の中で「いただきます」と言った。

習慣というものは一度植え付けられると抜けないものである。

ふと何気なく横をみると、喪介も同じように割り箸を親指と人差し指の間に挟みこんで手を合わせていて驚いた。

すると視線に気付いた喪介がちらっと晋の方を見たので、晋は何事もなかったように慌てて視線を蕎麦に戻す。

伸びてしまっ前に食べようとしたその瞬間、晋は信じられないものを見た。

しかしそれは喪介も同じだったらしい。

「あー！」

喪介はカップ蕎麦についていた掻き揚げを丸ごと熱々の汁の中に落としていた。

晋はせっかく丸い形の掻き揚げを煎餅のように細かく砕いていた。

お互いに信じられないというような顔をしてお互いの掻き揚げを見つめていたが、先に言葉を発したのは晋だった。

「なんいきなりで全部入れちゃうんだよ！それじゃあ掻き揚げが後半にやふにやになって小エビの食感しか残らなくなるじゃんか！ど　兵衛の掻き揚げは緑のた　きより柔らかくなる時間が早いんだぞ！？」

「バツカ、そのふにやふにやがまた良いんじゃないか！前半がカリカリで後半が汁によく染みてふにやふにやで2度楽しめるってもんだろ！？お前こそなんでせっかく綺麗な形してるものをそんな情け容赦なく割れるんだよ！？掻き揚げへの冒瀆だ！」

「何言つてやがる！？ふにやふにやのドロドロになった掻き揚げなんか食えるか！一気に入れるとすぐに汁に染みてふにやふにやにな

るから、こつやつて砕いて少しずつ入れていけば最後までカリカリのまま楽しめるだろうが！？掻き揚げがどうして後乗せなのか分かるか?! 本来の食感を楽しむ為だろ！お前こそ掻き揚げに謝れ！」

自分の主張を言いたいだけ言い合って、ぜはーぜはーと肩で息をしながら睨み合つ。

「フン！」

同時にそつぽを向き、それぞれのやり方でカップ蕎麦を啜る音だけがだだっ広い部屋に響いた。

本来の住人がいない所為か妙に静かな室内において、喪介はさつそく暇を持て余していた。
そろりと晋のいる部屋に入ると、晋はやはりキャンバスに向かって絵を描いている。

(へえ、本当に描いてるんだ)

普段は見られない真剣な横顔に好奇心が疼く。
喪介はそろりと部屋の中に入った。
どんなに狭い隙間でも物音立てずに進入できるのは喪介の特技の一つである。

「しーんーちゃん。あつそびーましょ」

「うぎゃあー！」

脇をツンと突付かれ、くすぐったさに文字通り飛び上がる晋だった。

「なっ、なにすんだよ馬鹿介！」

「あっはははは。おわっ、スゲ！」

晋の背後から見えた絵の出来栄えに喪介目を丸くする。

それは川辺に咲いた大きな桜を描いた風景画だった。

「うまつ、え、ビックリした！お前こんな特技があつたのかー。意外だな」

「これぐらい普通だよ。この程度なら美大に行けば描ける奴ゴロゴロいるから」

「へえ〜マジで？この白いとことか、特に芸術っぽい。なんとなくピカソっぽい」

「いや、それは失敗して塗りつぶしたとこだから」

「あ、そなの？まあいいや。とにかくマジで凄いつて」

「・・・どうも。でも、売れなかつたら意味ないし」

「ふーん。凄いと思うけどなあ。俺こんなに描けねえもんこれで何が駄目なわけ？」

それが分かれば苦勞はしない、と心の中だけで唸る晋。

その一方で、売れない絵の半分ぐらいには売れなかつた理由の心当たりがあつた。

背後からひよいつと覗き込んでくる喪介を無視して晋は絵を描き続ける。

その横顔が照れて赤くなっていることに気付き、喪介は気付かれな

いように肩を震わせた。

「なに笑ってんだっ」

「くははは。き、気にすんな。・・・あれ？なんか変な顔みたいなもの。心霊写真ばりに描きこまれてる・・・」

「え!？」

大声で言いつつ、晋は絵じつくりと睨みつける。

すると喪介が長い指を桜の花が咲き誇っている一角の一部を指差した。

「ここ。っーか、これなんかのホラーアート？」

「やかましいっ。あー！またやつちつまった。うあーっ今度こそ注意してたのにつー！あー！」

「またって？」

喪介がなんでもなしのように普通に聞く。

晋は言いづらそうに「あー」「っー」と唸っていたが、とつとつ歯切れ悪く話し出した。

「いや、オレにもよく分からないんだけど、いっつも絵を描く時変なものを気付かないうちに描き込んでるというか。意識してないし、そんなの描いた覚えも見覚えもないし・・・。写生してる時が一番集中してるから時々記憶飛ぶんだけど。風景だけじゃなくて花瓶とか描いてもそうなるんだよ。色付けると心霊写真みたいに浮かび上がってくるから、自分でも描かないように注意してたんだけど。試験とか実はそれで落とされたこともある」

「っわー・・・最悪だな。ていうか、これはこれで凄いなと思うけど。・・・ちなみにさあ、

これって荒野川にある桜の木？」

「そうそう。あそこ、でっかい桜の木がぼつんとあるじゃん。やっぱり有名なの?」

「いわくつきって意味では有名よ?」

「・・・え、それが原因?俺、見えちゃいけないものが見えてた?」
「うーん」

喪介は絵にギリギリまで近づき、顎に手を当てながら考え込んでいた。

この間のケサランパサランの事といい、なんとなくだが、ソツチ系の知識があるのだろうか。

いつまでも絵を凝視している喪介に不安になり、晋は心配げに声をかける。

「おーい?」

「・・・あ?」

「じゃねーよ!なんか分かったのか?」

「は?分かるわけないだろ」

「なっ、じゃあなんでそんな真剣に見てたんだよ」

「他にも顔がないかと思って。ほら、修学旅行の写真とか見てる時、心霊写真探したりしなかった?」

「人が珍しく真剣に聞いてやってんのにあホか!出てけー!!」

ピシャンと襖を閉め、部屋から喪介を締め出す晋であった。

「くそっ、やっぱり最悪だあいつ」

吐き捨てるように一人呟き、固い表情で絵の方に視線を移した。あれもやはり消した方が良いのか、と思った時。

襖の奥から、締め出したはずの喪介の声がはつきりと聞こえた。

「あの絵、まだ消さなくていいぞ」

「っ、まだいたのかよ。出て行って言っただろ」

「今日の昼は米が食いたいな。俺が帰るまでに出前のメニュー探すとけよ？」

「・・・あ？」

「昼まで消すなよ」

「なんでお前に言われなきゃなんないんだよ」

「いいから消すなよ」

「いい加減にしろよっ！理由を言え！」

しかし、返事は返ってこなかった。

「おい！喪・・・・・・・・」

襖を思いきり良く開くと、廊下の奥にに喪介の背中が小さく見えるだけであった。

何故か片手にスコップを持って。

「・・・・・・・・なんでスコップ・・・・・・・・？」

それだけが謎を残す。

あいつは畑でも耕しに行くつもりだろうか？

しばらく考え、最終的に晋は何も見なかったことにして襖を閉めた。

しかし、何かもういろいろと、気力が失せた。

今度こそはと思っていた桜の絵。

4月が誕生日だという芽衣子に、高校の入学祝いも兼ねてプレゼントするつもりだった絵だ。

久しぶりに気合を入れて描いていたというのに、これはない。

こんな絵をプレゼントしたところで、芽衣子は気味悪がるだけだろ

う。

力作だった分消すのは惜しいが仕方が無い。

消そう、といったものように黒い絵の具を紙パレットに出そうとした、その時。

「消すなよ」という喪介の言葉が頭の中でリフレインした。

「なっ、どうして俺があいつの言う事なんか気にしなくちゃいけないんだよ!」

喪介の声を掻き消すように頭を振り、再度黒い絵の具を出そうとする。

しかし、手が震えてしまった。

「俺だって、自分の描いた絵をこんな事で消したかねえよ。下手かもしれないけど、思い入れだって魂だっていつも込めてるのに」

今まで塗りつぶしてきた絵のこと、いつも悔しさを消すように黒で塗りつぶしていたことを思い出した。

いい加減慣れていたはずなのに、どうして今だけこんなに悲しくなるのだろう。

晋はとうとう黒い絵の具を手から離し、畳の上にゴロンと寝転がった。

(昼ぐらいまでなら待ってやる。別にあいつが言ったからじゃないぞ。絵を消すのを決心するのにちょっと時間がかかるだけだ)

心の中でそう言い訳しながら、晋は不貞寝を決め込んだ。

風がそよぐ桜の木の下で、サクツとスコップを土に突き立てると、喪介は見事に咲き誇る桜を見上げた。

「こいつもかなりの老樹だなあ。さあ、お迎えにあがりましたよ」

ざわざわと風の音以外の何かが蠢いている気配に、喪介は二ヒルに笑って見せた。

「さーと。やりますか」

軽い調子で言い、一度スコップを片手で器用にクルツと回し、それからサクサクと地面を掘っていく。

ある程度掘ってから喪介は息をつき、ノビをした。

少し休憩を挟んで、また掘り進んでいく。

すると、土の中から白い布に包まれたような何かが出てきた。

喪介はピクリと眉を動かし、嫌そうな表情でその白い布を見つめる。

「ほーむらー。焰ほむらくん」

白いビニールを見つめながら、喪介は誰かの名前を呼んだ。

その瞬間、辺り一帯にが瞬間的に熱気を帯びた風が吹き、一瞬で止む。

そして突如現れたその存在の姿はまさしく異形そのものであった。二本の角を生やしたその者の姿は人間に近いが、決して人間ではないと人目で分かるほどのその姿。

何も知らない者から見れば桜にとり憑いた夜叉の姿だと思うだろう。2メートル近くある巨体。人間ではありえない褐色の肌。美しい肉体を持ったそれはまさに「鬼」であった。

「なあ焰、どう思う？」
「何がだ？」

スコップの柄に顎を寄せ、喪介はごく普通にその「鬼」に問いかけた。

焰と呼ばれた「鬼」も平然と返す。

「あの絵描き、こんな深いところにいた「魂」を絵に描きやがった。俺だって気付かなかつたのに。焰は気付いた？」

「いや」

「だよねえ。ざっと見た感じ5体は埋まつてるぜ？表に出ていないだけでそれ以上かも。気になって掘ってみたら案の定だよ。昔の人の片手間なお墓つばいしどうしよう、絶対これタダ働きだよなあ。

戦前の人達だよ、これ」

「確かに100年以上は経っていると見受けられるが、・・・そういう問題か？」

「タダ働き」という単語が引っかかっているらしい焰に、喪介は呆れたような視線を向けた。

「お前がそんな事気にするなよ。人間の世界に慣れすぎたのかい？」
「そんな事は無い。それで俺を呼んだということは、やはり全員焼くのか」

「まあね。もう白骨化してるだろうから身元を割り出すの大変だし、金になりそうもないし、時間も無いし」

「面倒くさいんだろ？」

「あははは。うるさいな。焰も掘り起こすの手伝えよ。鬼の火に焼かれてもあの世にちゃんと行けるように、俺がきっちり送り届けるからさ。葬儀屋の名にかけて」

ぱちんとウイंकをする喪介に、焰は諦めた様にくくりと頷くしかなかった。

それから2時間後。

桜の木の下で死者の魂に向かって、喪介はポツリと呟いた。

「グツド・ラック」
安らかに逝け

鬼の火に焼かれれば灰さえも残らない。

それでもキラキラと輝く魂の残り火が長年見守っていてくれた桜の木に最期の別れを言うかのように美しく舞っていた。

そして一瞬後にはいつもの光景に戻っている。

「死に際は美しく、葬式は最期の晴れ舞台。見送ってくれる人がいるだけでも違うものだし、やっぱりちゃんとした形で最高の別れを演出するのが葬儀屋の役目だよな」

「タダ働きが嫌だからと言って殆ど俺に任せた奴の台詞じゃないな」

「焰・・・それ以上言つと3年前に親父の大事にしていた2億の花瓶割つて、その場で溶接してくっつけたことバラすよ？」

「悪かった。聞き流せ」

それから暫く桜を眺め、つかの間の花見気分を味わっていたその時、ぐうと喪介の腹の音が鳴った。

「……ツクツクツク」

「笑うなこら。しょうがないだろ、ずっと穴掘ってたんだから」

帰るぞつ、と赤らめた頬を隠すように踵を返す喪介の背中を、やれやれという表情で見つめる大男。

焰が喪介の後に続こうとしたその時、背後から男女3人の声が聞こえた。

「ほら見てー！やっぱり誰もいない」

「本当だ、桜も綺麗だし確かに穴場だね。でもこの桜つて、下に人が埋められるとか、本当は白っぽい花がつく品種なのにその死人の血を吸ってこんなにピンクの花が咲くとか、いろいろ曰くつきなんだけど」

「大丈夫だよー！ほら、シート広げたよ。睦実むじみも絆きずなちゃんも座って座って。風でめくれちゃう」

「ハルちゃんて行事とかお祭りとかほんっと好きだよね。ねえ兄貴。

「……おい、兄貴ー？睦実ー？」

「ん？どうした睦実。桜は上だぞ？下に何かあるの？」

「……いや」

睦実と呼ばれた茶髪の少年は、桜から少し視線を外した場所を見つめていた。

焰がいる場所だ。

焰は先ほどから少年と目が合っている事に驚いていた。

しかし少年の方ははっきりと見えている訳ではないらしく、時々視線が微妙に外れる。

すなわち、なんとなく何かを感じる方向を見てはいるが、それが何か分からない、といった所だろう。

いつまでもついてこない焰に、喪介はさりげなく片手を肩の高さまで上げた。

喪介の指に赤い糸が出現し、焰に繋がれていた糸をぐんと引っ張ると、焰の身体はいとも簡単に風船のように喪介の頭上まで飛び上がり、ふわりと消えた。

ように思えたが、喪介の傍らに火の玉のようなものが出現し、しゅんと項垂れるように喪介に謝っていた。

「すまない。珍し事もあるものだなと思って、つい」

今まで焰がいる場所の辺りを見る者はいたことはいたが、あそこまではつきりと目が合ったという事は喪介と喪介の身内以外では初めてだと焰は言った。

「へえ。じゃあ素質があるのかな、あの子」

「それは分からん。しかしざっと見たところ、いろいろなものに憑いていた。そういうものを引き寄せる体質なのかもしれん。ゆえに面倒事が起きそうな気配もあ。こちらに引き込もうとは思わない」

「そっか。晋と似た感じ？」

「タイプは違うが、あいつもそっだろう」

「そーだねー。じゃんじゃん巻き込みたいって気はするんだけど、面倒そうなのも事実かな。さっきのみにさ。でも向こうから首突っ込んできたら、俺は遠慮なく巻き込むよ?」

「喪介の好きなようにしたらいい。お前の行く場所に俺は行くだけだ」

「あはは。言う事が相変わらずだな。あー、お腹すいた。花見でもしたいな」

遠ざかっていく喪介の背中しか見えなくなった視界に、睦実は一人居首を傾げた。

「なーに? 睦実、なんかいたの?」

「あつ、もしかして幽霊? 睦実、昔から靈感強いもんね」

「イヤー! 嘘でしょ! ? せつかくの花見なんだからやめてよそーいうの! ?」

「遙はそういえばホラーとか駄目だったな」

「大丈夫だよハルちゃん。こんな真昼間から普通出ないって」

「いや、それが出たつばい」

「えっ! ?」

「鬼みたいに角を生やしたやつがその桜の下に・・・」

「イヤー! ?」

「なにそれ夜叉? 恰好いい! 他には? どんな感じだった! ?」

「やめて絆ちゃん! 睦実のバカー! 今朝あげたポテトサラダの恩を仇で返したな! ?」

「変わりにエビフライあげたたる」

「何その物凄くバランスの悪いトレード！？つか、睦実またハルちゃんちに泊まったの？二人とも付き合っちゃえばいいのに。4月から2人とも高校生なんだし？」

「それはない」

きっぱり同時に言い切った睦実と遙に、絆は目を丸くした。そして遙がニヤリと笑う。

「それに、睦実が本当に彼女作ったら絆ちゃんはマジ泣きするじゃない。一年前に睦実と同じ委員会の子と付き合いだした時とか大変だったよ」

「え、お前泣いたの？」

「な、泣いてないもん！」

真っ赤になっている顔を両手で覆いながら否定しても説得力は皆無だ。

遙の母親と睦実が作ったお弁当を広げながら、可愛らしい一つ年下の少女を見て和む睦実と遙であった。

風が優しく桜の木を揺らし、舞い散る花びらの元、それぞれの春を迎える。

喪介が帰ると、晋が玄関に駆け込んできた。

「へ、変なのが絵の寝てたただけどいつのまにか消えてなんで？」

「寝てたら絵の変なのがいつのまにか消えてただけどなんで？」

「それだ！お前、なんかしたのか？」

「・・・なんでそう思う？」

「・・・いや、意味ありげなこと言ったり、スコップ持ったりして、お前しか怪しいのがいないからだ！」

「晋がそう思うならそう思えよ」

「なっ」

「それよりさ、お腹すいた。米系の店屋物って何かある？」

「っ！寿司でも釜飯でもカツ丼でも好きなもん頼め！」

言い捨てるなりダツシユで部屋に走っていった晋に、喪介はぼかんとした後盛大に噴出した。

走っている晋の表情が明るく紅潮していた事を、腹を抱えて笑っている喪介は知らない。

そして夜。

芽衣子は喧嘩をしないようにと思ってあえて同じ種類のカップ麺を2人分ずつ用意したのだろうが、店屋物だった昼はともかく、朝の

一件から同じものを食べたいとは思わなかった。

ちなみに昼は米が食べたいという喪介の要望で釜飯の出前を取り、晋は鳥釜、喪介はイクラとサーモンの親子丼を食べた。

朝と同じようにお湯を注ぎ、5分待つ。

今度は朝のような争いが起きる事もなく、無事に食事を終えた。

と晋が思った矢先、喪介がポツリと話しかけてきた。

「なあ」

「な、なんだよ？」

思わず身構えてしまい、ほんの少しだけ緊張が走る。

それに気付いているのかいないのか、喪介は少し言いづらそうに、視線をずらした。

「ご飯、ある？」

「……………はい？」

朝から生まれた掻き揚げに対しての確執は、このカップラーメンの一件で全てまるく収まった。

カップラーメンの残りのスープに嬉々として白米を入れる晋に、喪介も笑いながら言った。

「やっぱりやるよなー、これ！」

「だよなー！よかったー俺だけじゃなくって」

「だって普通に足りねーもんなー！」

「あと普通にうまいしな！」

男達の笑い声が響く家に帰宅し、芽衣子達は揃って首を傾げたのであった。

6・呪い

人通りの少ない場所にある屋敷は車の音も人々の営みも聞こえず、いつも静かだ。

黄美子がさつそく今日のおやつであるアップルパイにフォークを突き立ててぐちゃぐちゃにしているのはご愛嬌として、とにもかくにもこの静かなティータイムを晋は密かに気に入っていた。

落ち着いた雰囲気存分に楽しみ、芽衣子の得意料理の一つであるアップルパイに舌鼓をうつっていたそんなひと時において、向かい側に座っていた喪介から突如放たれた言葉に晋はぼかんと口を開け、アップルパイの一欠けらを床に落とした。

「呪い!？」

「そ。お前の絵に変な顔やらが出るのは呪いのせい」

100g2000円の紅茶に舌鼓をうちながら、暢気な口調で言う喪介。

どうして喪介用のティーカップが用意されていて、しかも当然のように科賀屋家のティータイムに毎回参加しているのか。

これまでの経緯を説明する傍ら、その事で晋が内心モヤモヤしていると、芽衣子がパツと晋の方を見た。

「そんなことがあったなんて・・・晋さん、苦労されたんですね」

おおまかに話し終えたところで芽衣子は同情したような声音で晋にそう言った。

晋に貰った桜の絵にそんな逸話があったのかと驚いてはいたようだが、気味悪がられるというような反応が無い事に晋は心からホッとした。

「で、その呪いとやらの原因はなんなんじゃ？」

「え、呪いで本当に決定なんすか！？俺には全然身に覚えも現実味もないんですけど！」

屋敷の主であるジジの言葉に思わず取り乱す晋。

「呪いっていうと、やっぱり誰かが掛けてるってというのがセオリーだけど、何か変なものを拾ってその所為で呪いに掛かってるって可能性もあるしな。そこんとこどうなの？」

「いや、どうなのって言われても」

「喪介お兄ちゃん。それが本当に呪いっていう根拠は何かあるの？」

芽衣子の言葉に、晋は「そつだそつだ」と喪介を見る。

すると喪介は一度紅茶に口をつけ、もったいぶるような仕草をしてから話し始めた。

「まず晋にかけられてる呪いっていうのは、晋が持つ自信を妨げるものなんだ。例えば芽衣子に描いた桜の絵は、「芽衣子は喜んでくれるだろうか」っていう不安。本当に些細な、誰にでもある不安。他にも「誰かに認められなかったら」「罵倒されたら」「否定されたら」「怖い」「自信が無い」っていう、こういうネガキャン的な心の声が、無念で死んだ霊達の心の声と共鳴して、絵に浮かび上がってきてるんだよ」

一端言葉を切り、喪介は一つ息をついた。

「わざわざそつという霊がいるような場所を選んで描いてるお前も問題だけだな」

「しょ、しょうがないだろ！ここが良いって思っちゃうんだよ！」

喚いてから、晋は神妙な顔つきで口を噤んだ。
次の喪介の言葉を、話しを聞く体制で待つ。

「晋は自分が気付いてないだけで、そういう人には見えない「想い」を読み取るのが人よりも敏感なんだよね、多分。だから呼ばれやすいし、逆に呼び寄せることもある。古く使われた花瓶や人形なんかにそういう霊がのり移るのも、お前が絵に魂を込めるのと同じぐらいにモデルを凝視してるから、そこに「想い」が入る道が出来るんじゃないかと思う。その「想い」にそこら辺にいる霊が共鳴して、絵になって訴えかけてくるんだよ」

「・・・・・・・・」

俄かには信じがたいと思いつつも、喪介の口調は真剣そのものであるために返す言葉が出なかった。

普段は「真面目」という言葉とは無縁に見える喪介の言葉だけに、晋は真実味があるように聞こえた。

しかしだからと言って、全てが簡単に信じられるわけがない。そう思い、晋は思い当たる疑念を言ってみた。

「でも何も変なのが無い絵だってあったんだぞ。この前、天象さんに買ってもらった「蛙」の絵とか」

「ほうほう、あれか」

古本屋で見た絵を思い出したようにジジが相槌を打った。

しかし喪介は表情一つ変えることなく、論破する。

「俺はそれは見てないけど、多分それは晋に不安が一切無かったからだろ」

「は？」

「その絵によつぽど自信があつて売れないなんて微塵も思わなかつたか、切羽詰つてネガティブ思考を打ち出す暇もなかつたかのどつちか。あるいは両方」

喪介に指摘され、晋は思わずその時のことを思い出していた。

家もなく、金もなく、全てをかける思いで「蛙」の絵を描き上げ、その出来上がりに興奮したままの勢いで売り込みに行った。

完成度にも満足していた上に、500円にも満たない値段設定で売れないとは確かに思わなかつた。

売れた時は確かに感動して泣いたが、売れないとは思っていないくても売れたのが単純に嬉しかつたからだ。

それになにより、あの「天象堂」という古本屋の長い時間を吸い込んだような空間に合うように描いた絵だつたからだ。

あの店のどこかに飾れば絶対に映えるという自信があつたものだから、確かにネガキャンしている暇はなかつたかもしれないが。

「そ、そう言われると……」

「つまり、お前がネガティブ思考にならなければ、変な絵は描かないってことさ」

はつきりと言われて、晋の頭の中は隅から隅まで「えー」という心境だつた。

「じゃあ、あの桜の絵の変な顔みたいな奴が消えたのは、別にお前が何かしたからとかじゃなくて、単純に……」

「晋さんが喪介お兄ちゃんに褒められて自信を持ったからなんです
ね！」

「うおわあああああ！？」

はつきりと良い笑顔で言い切つた芽衣子。

その結論に晋は叫び思考が真っ白になり汗を流しながら頭を抱えた。

「違うー！俺はお前が嫌いだったんだー！」

「あー、嫌な奴に褒められるとなんでかくすぐったくなるよなー」

「棒読みで分かった風に言うなー！」

まるでヤンキーが良い事をする途端に良い人に見える方式ではないか。

確かに喪介に手放して褒められた時はちよっぴり感動さえしたが、そんな理由で長年の悩みが解消したなどと、恥ずかしすぎて穴があったら入りたいと全力で思う晋であった。

「安心しろ、晋。俺も別にお前に好かれても嬉しくないから」

「お前に言われたくないわ！こっちの台詞だっつーのっ！」

（俺は芽衣子ちゃんに喜んでもらいたくて描いてたわけで、喪介に褒められたからって何で自信持たなくちゃいけないんだ！？た、確かに褒められるのは好きだが、それにしたって単純すぎないか俺）

己の単純さに自己嫌悪に陥っている晋を横目に、喪介は締めくくるようにこう言った。

「まあ、ともかくそれでお前の不安が解消されて、そこで行き場の無くなった霊の無念な想いを、丁度良く俺が成仏させたのが相成って、絵の中の顔が消えたわけ。つまり俺のおかげだね」

「は！？って、やつぱりお前が何かしたんじゃないやねえか！あの変な紙に吸い込んだのか！？」

「さあ、知らなーい」

とぼける喪介に、晋は更に追及するが横から横に流すだけ。

笑顔で頷く芽衣子に、言い合いをしていた喪介が合間を見計らって片手を上げて言った。

「あ、芽衣子、俺アップルパイもう一切れ」

「図々しいんだよお前はっ！トイレ掃除もやってないくせに！働かざるもの食うべからず！」

「俺だって毎年大掃除の時は借り出されてるわ！いいじゃねーか！応答なんだぞ！？」

「あ、あの、まだたくさんありますから……」

おろおろと仲裁に入る芽衣子だったが、2人の言い合いは暫く止みそうになかった。

その様子をジジは溜め息を吐き、黄美子を振り返った。

「お茶はいつ持ってきてくれるんじやろうのう。のう？黄美子」

「ねー」

口元にアップルパイの生地や林檎をたくさん付けながら、よく意味が分かっていないだろう黄美子ふんにやりと笑って小首を傾げて見せた。

それにジジも頬の筋肉を崩す。

「おいしーねー」

「そうじゃのう。ほれ、ジジのも食べ」

「うん！ジジ大好きー」

「ほつかほつか」

ほっほ、と笑いジジ馬鹿を晒すジジに気付くことも無く、本日のティータイムは賑やかに続きそうだ。

7・猫

街の雑踏。

途絶えぬ人々の行き交う様を、黒猫はじっと見つめていた。

黒猫は不意に目を逸らし、人のいない狭い路地を抜ける。

タバコ屋の前を通ると、皺だらけのお婆ちゃんがほがらかな笑みを浮かべて黒猫に笑いかけた。

「あらクロちゃん、今日もお散歩かい？」

「ニャア」

そして黒猫はタバコ屋の前を横切る。

黒猫がただ歩いていると、とある機嫌の悪そうな男が歩いてきた。

「あっちへ行け！シッ」

理不尽に追いやられ、それでも黒猫は我が物顔で塀に飛び乗った。

雑踏から離れた住宅街の中にある公園に行くと、次々と声がかかる黒猫である。

「あーミーちゃん」

小さな女の子はそう呼びながら黒猫を追いかけた。

そして公園を抜け暫く歩くと、とある古びた建物に辿り着いた。

その建物の中に入り、黒猫はやはり我が物顔で悠然と歩く。

すると頭上からお声がかかった。

この古びた建物の住人であるらしい、同じ顔をした人間が2人だ。

「おや、クロエじゃないか」

「また来たんだねえ」

クスクスと笑う双子の少年達は、互いに左右対称になるように眼帯を掛けている。

2人合わせて左右一つずつの瞳を面白げに細めて、双子の少年達は黒猫を見送った。

この古い建物は科賀屋の隣にある。

「加賀屋」という骨董屋だ。

奥の部屋では、茶猫が黒猫を出迎えた。

そしてなにやらこの部屋の奥で、猫達の密談が始まったようである。

それから暫くして、今度は黒猫は縁側でジジが将棋を打つのをじつと大人しく見ていた。

いくらかすると不意に興味を失ったかのように顔を後ろ足で洗い、腹を出してジジの隣で寝転ぶ。

「眠くなつたのかい？タマ」

にやあ、と気の抜けた返事をしたと思えば、黒猫はゴロンとした。洗濯籠を持った芽衣子が通りかかる。

「お爺ちゃんタマって呼んでるの？みんなクロって言ってるよ？」

「この家に来た時はこいつはタマじゃよ。のう、タマ？」

にあゝ

和やかに同意を得てみると、言葉が通じているのかいないのか、やはり暢気な鳴き声が返ってくる。

それを見て、ジジと芽衣子は互いに顔を見合わせて笑った。

「その黒猫、いつもお爺ちゃんの隣で寝てるね」

「昔からそうじゃよ。指定席になつとるわい」

どこか自慢げに言うジジに、芽衣子も軽く笑って頷いた。

「そういえば芽衣子。晋君はどうしたんじゃ？」

「絵が仕上がったから、画廊に売り込みに行くって出かけていたよ。あれから変なものあまり映らなくなっただみだい」

「ほうかほうか。頑張ってるなあ、若者よ」

「やだ、お爺ちゃんたら年寄りくさい」

「ほ？」

クスクスと面白そうに笑う芽衣子に、きよとんとするジジ。

その横ではやはり黒猫がのんびりとあくびをした。

晋が絵を持って公園を通り抜けようとした時、ベンチに見知った顔が
いることに気付いた。

「あれ？」

「んあ？」

声を掛けると、喪介はコンビニ弁当を持って箸を口に銜えたまま、
こちらを見上げた。

そして喪介は箸を持った手を上げて、晋が近づいてくる間に口をモ

「ゴモゴとしてから食べ物飲み込み、ようやく挨拶をする。」

「よ」

「よ、じゃねーよ。お前そんな寂しい食生活してたのか」

「いや、ちよつと前までホームレスしてた奴に言われたくないから。いいでしょ別に」

「芽衣子ちゃんに言えばなんか食わしてくれるんじゃないの？ムカツクけど」

「俺はそこまで恥知らずじゃありません」

「お前の恥の境界線がわかんねーよ」

そう言ったところで、晋は喪介の足元に茶色い物体が纏わり着いていることに気付いた。

どこかで見覚えのある茶色い毛並みの猫だった。

茶猫を見つめて暫く唸ってから、晋はポンと手を打った。

「あ、骨董屋のときの猫か」

「そうそう。ロージーっていうの」

「なんかえらい懐かれてんな」

「あつたりまえだろ。こいつが目も開かないうちから面倒見てんだぞ？」

里芋の煮物を箸で掴んでひらひらとさせ、ぱくりと食べてから喪介は話し出した。

「骨董屋の双子が5歳ぐらいの時に拾ってきてさ、俺と双子と芽衣子で面倒見てたんだ。骨董屋にはもう一人俺より年上の兄ちゃんがいて、それが双子の兄貴なだけだな。凄かったんだよ。最初はあそこで猫飼うの反対してたくせに、俺達が強行していざ飼い始めたらなんだかねで面倒見てくれてさ。俺達猫の飼い方とか知らなく

て、どうすればいいんだ？って悩んでるうちに気付いたらその人がミルクやら哺乳瓶やら全部用意してくれた」

「へー」

「しかも出し方が面白いんだよなあ。俺達がミルクを皿にやっても子猫だから飲めなくて、そしたら後から「こんなこともあるのか」と思っただけじゃね？って話したら「既に準備はしてある」って猫缶と餌が選り放題だったし、ロージーが具合悪くなって俺達がオロオロしてたら「こんなこともあるのか」と思って、行き付けの獣医を作っておいた」って言うので、すぐに病院に連れて行って治療してもらえた。実は俺達が学校に行ってる間に、月1で獣医に診せてたらしい」

「へー、凄いなその人。頼もしいじゃん」

「いや、それは確かにそうなんだけど、準備が良すぎて逆に怖かった……」

「そ、そうなんだ……」

微妙な返事を返しつつ、晋は密かに首を傾げていた。

あの骨董屋には今まで2、3回ほどしか行ってないが、そんな人と会った事がない。

「俺、一度も見たことないかも」

「あー確かに昼間はあるまり出てこないなあ」

「ていうか、双子以外見たことないんだけど。店の人とか他にいないのか？あそこ」

「……あそこはなあ、両親が昔事故で亡くなったんだよ。その時その人が21歳ぐらいだったから、男で一つで店と子育て両立してたんだ」

「うわ、凄いな……。つか、そうだったんだ」

「……俺さあ、その時10歳ぐらいだったんだけど、実はなんとなくあそこの両親が死ぬって分かってたんだよね。これ言う

と、嘘つばく聞こえるから嫌なんだけど」

「は!？」

「寿命が分かるっていうか、なんとなくだけど、あーこの人もう長くないなあ、ってさ。あの両親が子供置いて出かけていく時、俺も一緒に留守番頼まれたんだけど、やっぱり嫌な予感がして。だけど根拠もないし、人の家だったし……何とも言えなかった。そうしたら警察から電話が来て、事故だって言ってきて」

「……」

「あの時、引き止めてればなーって。分かったのに、ちょっとでも時間がずれてたら、もしかしたらって思うと」

「お、お前は悪くない!しょうがないじゃんか、そんなの」

「……うん。そう思わなくもないんだけど」

「思えよ。しょうがないって。だって、しょうがないじゃんか」

「なんだ、しょうがないばっかだな」

「しょうがないだろ。しょうがないんだから!」

「八八」

喪介が小さく笑ったところで、どんよりと暗くなっていた空気が霧散した事に晋はようやくホッと一息ついた。

しかし心のどこか片隅で、喪介は一体何者なんだろうという疑問が頭をもたげていた。

本当に喪介には寿命が見えるのかと、晋には判断がつかない。

そんな晋の様子に気付いていないのか、喪介はポツリと呟いた。

「でもさ、ほんっと運が良かったよ、ロージーは。あのまま双子に見つけられてなかったら、お前もこの世にいなかったかもしれないんだぞ?」

茶猫を片手であやしながら喪介が笑う。

それを見て、晋も細かい事を気にするのをやめて小さく笑った。

「そうだなー。不思議な縁であるもんだな」
「だろ?」

「よかつたなー。お前、ロージー? だっけ」

晋がしゃがんでそつと手を伸ばすと、ロージーは大人しく撫でられていた。

するとふと喪介が思い出したように晋に声を掛ける。

「ところでお前何しに来たの?」

「あ、いや、ちょっと隣の町まで絵を売り込みに。この辺で画廊ないからさ」

「へえ、やつぱり本格的に絵描き目指してるのか?」

「まあな。ここまできたら出来ることは全部やっておきたいし、やらないことで後悔したくないからな!」

「そっか。頑張れよ。ところで画廊って面接とかやんの?」

「え? さあ。始めて行くから分かんないけど、そういえばどうなんだろう? いろいろ聞かれたりするのかな!?」

「よし。予行練習しとこう。夏野 晋くん、好きな諺は?」

「我輩の辞書に不可能の文字はない!」

「それ諺じゃねえ!」

すかさず叫ぶ喪介の足元で、ロージーはやれやれと言わんばかりにそつばを向き、二人から離れていった。

それから王様のように歩きながら、公園を後にする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9874m/>

たった一つの世界

2011年10月7日18時54分発行